

春子のおぢいさんらしいぐわんめいな老人が一人居て、丸で話しにならなかつた。

新吉は苦い悲しみを雪に曝らして、松風の音に、海の荒れ狂ふ日を想像した。斯うしてゐてもならない。

春子は二宮にホッ居ないものと思つた。

文子夫人に一度停車場であつた。

無想庵は春子と熱海で同衾してゐやしないかとも思はれた。

吸取紙のやうに浮き々々足どり軽く、頭へばかり血が上つて、新吉は雨に濡れて藤澤まで歩
いた

日蓮宗のお寺があつた。

其處で新吉は観音經をやつた。

川を渡つた。

見晴らしの好い旅館に、赤いコシマキをした女が、二階の雨戸をくつてゐた。

繪ノ具箱を提げた男と女が薄の間から出た。